

## 「選ばれた教会へ」

ヨハネの手紙第二 1:1~13

### はじめに

【新改訳改訂第3版】

#### Ⅱ ヨハネ

1:1 長老から、選ばれた夫人とその子どもたちへ。私はあなたがたをほんとうに愛しています。私だけでなく、真理を知っている人々がみな、そうです。

長老から、ある夫人とその子らに宛てられた手紙、それがこのヨハネの手紙第二です。長老とはおそらく筆者であるヨハネ自身のことだと考えられますが、ここで彼は自身の名ではなく、立場、役職名を用いています。つまりこれは個人的な私的な手紙ではなく、神から与えられた権威を用いて、すなわち神の御言葉を代弁しようとしていることが示されていると考えられます。ちなみにこの「長老」とは、岩波訳聖書の注釈によりますと「紀元後一世紀から二世紀にかけて確立されてゆく教会職制としての長老とは異なり、より個人的な資質と権威に基づいて個別教会を指導している教師」のことであると説明されています。つまりこの手紙に記された内容は、「長老」という神に立てられた教師から、その生徒たちへの指導であり教えであるということだと考えられます。

また「選ばれた夫人とその子どもたち」とは、ある特定の個人を指すという解釈と、教会の総称、筆者であるヨハネが独自に適用した尊称であるという解釈があります。いずれにしても今日の私たちにとっては、この手紙を神の御言葉、また御教えとして受け取るわけですが、次のヨハネの手紙第三においては「愛するガイオへ」と個人名がはっきりと明記されていることから、この第二の手紙の「選ばれた夫人とその子どもたち」は宛先となる教会の総称、または尊称であると考えられます。何より「ほんとうに愛しています。」と言うならその愛する人の名前を記すはずです。ですからこの手紙は教会に宛てて、しかも愛される「選ばれた」教会に宛てて書き送られたものであると考えられます。

### 1. 真理と愛

1:2 このことは、私たちのうちに宿る真理によることです。そして真理はいつまでも私たちとともにあります。

「真理」という言葉が強調されています。一般的には「いつどんなときにも変わることもない、正しい物事の筋道。真実の道理」などと理解されているものですが、ヘブル語でこれをエメット(אֱמֶת)と言います。この言葉の本来の意味を知るために、聖書で最初にエメットが使われた箇所を見てみましょう。

【新改訳改訂第3版】

#### 創世記

24:4 あなたは私の生まれ故郷に行き、私の息子イサクのために妻を迎えなさい。」

アブラハムは一人息子であるイサクの妻となる女性を探す旅に、自分のしもべを遣わします。そしてしもべはその旅先で神に祈り、見事イサクの妻となる女性リベカに出会います。そこでもべが語った言葉の中に聖書で最初のエメットがあります。

【新改訳改訂第3版】

創世記

24:26 そこでその人は、ひざまずき、【主】を礼拝して、

24:27 言った。「私の主人アブラハムの神、【主】がほめたたえられますように。主は私の主人に対する恵みとまこととお捨てにならなかった。【主】はこの私をも途中つつがなく、私の主人の兄弟の家に導かれた。」

ここで「まこと」と訳されているのが聖書で最初のエメットです。アブラハムのしもべは、神の「恵みとまこと」によってイサクの妻となるリベカを見つけることができた、導かれたと言っています。このようにエメットとは本来、命じられた、遣わされたその目的を「途中つつがなく」果たし終えるために神から与えられるものという意味があると考えられます。つまり「真理」とはただ知る、ただ聞いて理解すれば良いというものではなく、果たさなければならない目的、実行し、完了すべき計画を伴っているということです。そしてその計画とは、イサクの妻となるリベカについての出来事に表されているように、花婿に花嫁を迎えさせる、すなわち結婚させるものであると考えられます。これは御父である神が、そのひとり子、御子イエシュアのためにその花嫁（たち）を迎えるという神のご計画を指し示していると考えられます。この花嫁とはもちろんこのご計画を信じ、自分をイエシュアの花嫁だと信じる者たち、教会、クリスチャンを指していると考えられます。

このように「真理」エメットとは本来、花婿であるイエシュアと、花嫁である教会を結び合わせるという目的のために立てられた神のご計画を指し示すものであると考えられます。一般的な意味における「真理」は、不変のもの、正しいものと定義されてはいても、実際にそれが何であるのかは人の理解や価値観、また状況によって様々です。しかしこのように、ヘブル語的視点から聖書に記された、すなわち神の提示する「真理」について考えるならば、その内容は具体的で、しかも一つの目的、完成を伴ったものであることが解ります。ですから「真理はいつまでも私たちとともにあります。」と書き送ったヨハネのこの言葉には、この手紙の読み手である私たちが「真理」に表された神のご計画のために、イエシュアの花嫁として「選ばれた夫人」であることが指し示されていると考えられます。

1:3 真理と愛のうちに、父なる神と御父の御子イエス・キリストからの恵みとあわれみと平安は、私たちとともにあります。

先ほどのエメットの最初の言及で見たように、「真理」すなわち神のご計画とは、イサクに関するアブラハムの命令に表された、御子イエシュアに関する御父のご計画です。ここでは「真理と愛のうちに」とあるように、「真理」に「愛」という言葉が補われています。この「愛」はヘブル語でアハヴァー(אהבה)と言い、申命記 7:8 で最初に使われています。

【新改訳改訂第3版】

申命記

7:6 あなたは、あなたの神、【主】の聖なる民だからである。あなたの神、【主】は、地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んでご自分の宝の民とされた。

7:7 【主】があなたがたを恋慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。

7:8 しかし、【主】があなたがたを愛されたから、また、あなたがたの先祖たちに誓われた誓いを守られたから、【主】は、力強い御手をもってあなたがたを連れ出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手からあなたを贖い出された。

「しかし、主があなたがたを愛されたから、」という箇所にも最初のアハヴァーがあります。この御言葉はアブラハムの子孫であるイスラエルの民に対して語られたものです。この「愛」は前節の7:6「地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んで」、また7:7「あなたがたを恋慕って、あなたがたを選ばれた」という言葉が言い換えられたものと考えられます。つまり「愛」とは本来、神の御心による選びを指し示すものであり、そしてその選びとは、神が契約を交わされたアブラハムとその子孫であるイスラエルの民、ユダヤ人を指し示していると考えられます。そしてこの「愛」アハヴァーもまた「真理」エメットと同様に一つの目的を持っています。それはイスラエルの民を「聖なる民」「ご自分の宝の民」とするというものです。ですから「真理と愛のうちに」とヨハネが記したこの御言葉には、花婿イエシュアと花嫁となる教会が結ばれることと、アブラハムとの契約の故にイスラエルの民が選び出され「聖なる民、宝の民」となることという二つの目的を伴ったご計画が指し示されていると考えられます。それが「父なる神と御父の御子イエス・キリスト」の与える「真理と愛」であると言えます。

## 2. 恵みとあわれみと平安

またその「真理と愛のうちに」、御父と御子イエシュアからの「恵みとあわれみと平安」がある、「ともにあります。」と記されています。この「恵み、あわれみ、平安」という三つの言葉の意味についても考えてみましょう。

### (1) 恵み

「恵み」をヘブル語でヘセド(חֶסֶד)と言い、創世記 19:19 にその最初の言及があります。

【新改訳改訂第3版】

創世記

19:19 ご覧ください。このしもべはあなたの心にかない、あなたは私のいのちを救って大きな恵みを与えてくださいました。

この箇所は、その大きな罪のために神の怒りによって天からの火と硫黄によって滅ぼされた町、ソドムとゴモラの出来事ですが、アブラハムの甥のロトは、ソドムの住民の一人であったにも関わらず、神の「恵み」ヘセドによってその滅びを免れました。つまり「恵み」ヘセドとは本来、神の怒りである滅びを免れること、救われることを意味していると考えられます。

### (2) あわれみ

「あわれみ」はラハミーム(רַחֲמִים)と言い、最初の言及は創世記 43:14 です。

【新改訳改訂第3版】

### 創世記

43:14 全能の神がその方に、あなたがたを**あわれませて**くださるように。そしてもうひとりの兄弟とベニヤミンとをあなたがたに返してくださるように。私も、失うときには、失うのだ。」

この言葉はアブラハムの子イサクの子ヤコブ（後のイスラエル）が、自分の息子たちをエジプトに遣わす際に語ったものです。息子の一人シメオンはエジプトで捕虜となっていました。更にエジプトの宰相は末息子のベニヤミンを要求していました。そこでヤコブは神の「あわれみ」ラハミームによって、「もうひとりの兄弟」であるシメオンと、そしてベニヤミンが無事に帰って来られるようにと祈っているのです。このように「あわれみ」ラハミームとは本来、失われた者が帰って来るという意味があると考えられます。実際に人質となっていたシメオンと、そしてベニヤミンは父ヤコブのもとに帰ります。しかもそれだけではなく、死んだと思っていた最愛の息子ヨセフにまでも再会することになります。これが神の「あわれみ」です。ここでヤコブが「私も、失うときには、失うのだ。」と言っているように、かつてのイスラエル王国は、旧約聖書が記す通りに滅び、失われました。しかし神の「あわれみ」ラハミームによってそれが再び回復されることがヤコブとその息子たちについて記されている出来事の中に表されていると考えられます。このように「あわれみ」ラハミームとは、イスラエルの12人の息子たちに表された、イスラエルの失われた12部族の回復、すなわちイスラエルの国家としての再建を指し示す言葉であると考えられます。

### (3) 平安

「平安」はシャーローム(שָׁלוֹם)です。最初の言及は創世記 15:15 です。

【新改訳改訂第3版】

### 創世記

15:15 あなた自身は、**平安**のうちに、あなたの先祖のもとに行き、長寿を全うして葬られよう。

この御言葉は神がアブラハムに語られた預言、出エジプト記に記されている神のご計画についてのものですが、ここで「平安のうちに、あなたの先祖のもとに行き」という箇所には聖書で最初のシャーロームがあります。つまりシャーロームとは本来「先祖のもとに行く」ことを指し示していると考えられますが、ここで「先祖（単数、すなわち『先祖たち』ではない）」と訳されているヘブル語はアーヴ(אָב)で、これは本来「父」と訳される言葉です。ですから「平安のうちに、父のもとに行く」とも訳せるわけです。しかしアブラハムについてのこの御言葉は「型」だと考えられます。彼以上に、いや地上の誰にもまさって自分に与えられた生涯、働きを「全うして」そしてアーヴ「父」のもとに行かれた方、御父の御子イエシュアが存在がそこには表されていると考えられます。イエシュアは弟子たちに対して、ご自分が御父のみもとに行くその目的についてこう述べておられます。

【新改訳改訂第3版】

### ヨハネの福音書

14:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。

14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

イエシュアが御父のみもとに行くその目的は「あなたがたのために、場所を備えに行く」ためです。この「あなたがた」とはもちろんイエシュアの弟子たちのことであり、彼ら同様に神に選ばれ、神を信じ、またイエシュアを信じる者のことです。ですから「平安」とは「父のもとに行く」ことを指し示し、「父のもとに行く」ことは、私たちのために「父の家」の中に場所を備えてくださる、「わたしのいるところに、あなたがたをもおらせる」場所を備えてくださるという、イエシュアを指し示す言葉であると考えられます。

このように、「恵み、あわれみ、平安」という三つの言葉が指し示すものをまとめると以下ようになります。

- ①「恵み」…神の怒り、滅びを免れること。神の選びにより救われること。
- ②「あわれみ」…イスラエルの回復、イスラエル王国の再建。
- ③「平安」…イエシュアを信じる者たちが「父の家」に場所を備えられ、迎えられる。

以上のように解釈するならば、①「恵み」とは被造物全体に関すること、すなわち神の怒り、滅びがあり、それによって滅ぼされる者と、その滅びを免れる者があるという神のご計画が指し示されており、また②「あわれみ」とは、アブラハムの子孫であるイスラエルの民、ユダヤ人に関することであると考えられ、そして③「平安」とは、イエシュアの空中再臨、空中携挙によって天に引き上げられる教会、クリスチャンに関する神のご計画を表したものであると考えることができます。ですから前述の「真理と愛」、そしてこの「恵み、あわれみ、平安」もともに神の選びの民イスラエル、ユダヤ人と、そしてイエシュアの花嫁となる教会、クリスチャンという二つの存在についての神のご計画を指し示した、説明したものであると考えられ、一方にないものをもう一方が補う、互いに補い合うようにして記された言葉であると考えられます。ですから「真理と愛のうちに、父なる神と御父の御子イエス・キリストからの恵みとあわれみと平安は、私たちとともにあります。」とは、イスラエルと教会に対するそれぞれ異なった神のご計画があるにしても、それらはすべて御子イエシュアによってなされる御父のご計画であり、「ともにある」計画、すなわち一つの計画であるということが表されていると考えられます。

### 3. 互いに愛し合う

1:4 あなたの子どもたちの中に、御父から私たちが受けた命令のとおり真理のうちは歩んでいる人たちがいるのを知って、私は非常に喜んでいきます。

「真理」とは、先ほど述べたように、花婿イエシュアと花嫁となる教会とが結ばれることを目的とする御父である神のご計画です。ここでは「真理と愛」ではなく「真理」のみが用いられています。冒頭で述べたように、この手紙は「選ばれた夫人とその子どもたち」である教会に対して書かれたものですから、このように「真理」だけが強調されていても不思議ではありません。筆者ヨハネは「子どもたちの中に・・・真理のうちは歩んでいる人たちがいる」ことを喜んでいきます。しかし子どもたちの中に「真理」を知る者が何人かいるということであり、子どもたち全員が、すなわち全ての教会、クリスチャンが神のご計画を知らされ、理解して待ち望んでいるわけではないようです。今日の教会もそうだとと言えます。自分の幸福と繁栄のためだけにイエシュアを信じ、神を求めて教会に集う者が多くいます。

1:5 そこで夫人よ。お願いしたいことがあります。それは私が新しい命令を書くのではなく、初めから私たちが持っていたものなのですが、私たちが互いに愛し合うということです。

「互いに愛し合うこと」この命令は最初新しい戒めとしてイエシュアから弟子たちに与えられたものでした。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネの福音書

13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

しかしこの弟子たちから始まった教会にとってこの命令は、新しい命令ではなく「初めから私たちが持っていたもの」であると言えます。そしてこの「互いに愛し合う」という言葉の指し示す意味は、文脈すなわちイエシュアがこの戒めを与えられた時の状況、話しておられたその話の内容から考えるべきであるというのが私の考えです。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネの福音書

13:33 子どもたちよ。わたしはいましばらくの間、あなたがたといっしょにいます。あなたがたはわたしを捜すでしょう。そして、『わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない』とわたしがユダヤ人たちに言ったように、今はあなたがたにも言うのです。

13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

13:36 シモン・ペテロがイエスに言った。「主よ。どこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。「わたしが行く所に、あなたは今はついて来ることができません。しかし後にはついて来ます。」このように、「互いに愛し合いなさい」というイエシュアの戒めは、イエシュアが弟子たちを離れ、御父のみもとに行くということ、「しかし後にはついて来ます。」ということ、つまり

【新改訳改訂第3版】

ヨハネの福音書

14:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。

14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。

という神のご計画の中で与えられた戒めなのです。ですから「互いに愛し合う」とは、一般的な意味で捉えるような赦し合い、受け入れ合い、助け合いという類のものではなく、花婿が花嫁を迎えに来るようにイエシュアが来られる日を、互いに教え、求め、待ち望むことを目的としたものであると考えられます。ヘブル語で「愛する」ことをアーハヴ(אהב)と言いますが、この言葉は創世記 22:2 でアブラハムが一人息子のイサクを「愛している」という部分に初めて記されました。もちろんアブラハムは一人の父親として、自分の息子であるイサクを愛したことでしょう。しかし彼がイサクを愛した理由はそれだけではなく、愛すると思われ

【新改訳改訂第3版】

## 創世記

17:19 すると神は仰せられた。「いや、あなたの妻サラが、あなたに男の子を産むのだ。あなたはその子をイサクと名づけなさい。わたしは彼とわたしの契約を立て、それを彼の後の子孫のために**永遠の契約**とする。

このようにイサクは、神がアブラハムとその子孫とに与えられた約束「永遠の契約」の象徴でした。ですからアブラハムはイサクの中にそれを見、それをアーハヴ「愛した」のです。ですからアーハヴには神の約束「永遠の契約」を「愛する」という意味があると考えられ、「互いに愛し合う」とは、イエシュアが私たちを迎えるために再び来られるという約束をともに愛することであるとも考えられます。

## 4. 反キリスト

1:6 愛とは、御父の命令に従って歩むことであり、命令とは、あなたがたが初めから聞いているとおり、愛のうちを歩むことです。

「互いに愛し合う」ことがここでは「愛のうちを歩む」と言い換えられて強調されていると考えられますが、「歩む」という言葉は、一般的な意味で捉えるならばそれは何か自分の力で一步一步前進していくようなイメージを持ってしまいます。しかしヘブル語ではこれをハーラフ(הָלַךְ)と言い、本来は川が流れる様子を指す言葉なのです。

【新改訳改訂第3版】

創世記 2:14 第三の川の名はティグリス。それはアシュルの東を**流れる**。

川の水というもの、自分で流れを速くしたり遅くしたりしません。好き勝手な方向に行くこともなく、ただ川筋に従い、まさに流されるままに進みます。私たちの歩みとは本来、そのようなものであるべきだということなのです。この世の考え方から見るならば、流されるまま生きるという生き方は、軽蔑されるべき愚かな生き方です。なぜなら人が目標を持ち、それに向かって自らの努力で進んで行くことで賞賛されるのがこの世の考え方だからです。しかし聖書に記された、神の提示する「歩む」とは、ただ神にのみ従い、神が命じられる場所だけに行き、神が語れという言葉だけを語り、神がせよと命じられることだけを行う、神の御心のままに生きるという、まさに神に流される生き方です。イエシュアの生き方とはまさにそのようなものでした。

【新改訳改訂第3版】

## ヨハネの福音書

5:19 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分からは何事も行うことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行うのです。

12:49 わたしは、自分から話したのではありません。わたしを遣わした父ご自身が、わたしが何を言い、何を話すべきかをお命じになりました。

このように、イエシュアのこの姿勢、生き方「歩み」は、自ら考えを持ち、自らの意志によって判断し、決断し、行動することが美德とされる「歩み」であるというこの世の考え方とは全く相反するものであると言えます。つまりこの世の考え方による「歩み」は、イエシュアのそれを否定するものであると言えます。ヨハネはこのような考え方を「反キリスト」と呼んでいます。

1:7 なぜお願いするかと言えば、人を惑わす者、すなわち、イエス・キリストが人として来られたことを告白しない者が大ぜい世に出て行ったからです。こういう者は惑わす者であり、反キリストです。

1:8 よく気をつけて、私たちの労苦の実をだいなしにすることなく、豊かな報いを受けるようになりなさい。

「よく気をつけて」とあるように、私たちはよく気をつけていないと、すぐにこの世の考え方すなわち「反キリスト」の考え方で物事を捉え、聖書さえもそのような捉え方で理解しようとしてしまうのです。今回取り上げた「真理」「愛」「恵み」「あわれみ」「平安」そして「歩く」という言葉に対するこの世の理解と聖書が本来指し示している意味の違いを見れば、私たちの思いや考えがいかに「反キリスト」の影響を受けているかが解ると思います。

## 5. キリストの教えのうちに

1:9 だれでも行き過ぎをして、キリストの教えのうちにとどまらない者は、神を持っていません。その教えのうちにとどまっている者は、御父をも御子をも持っています。

この世での時間に限りがある人は何かにつけ急ごうとします。親や教師は子どもに「早くしなさい」と教え、社会はその働きの速さを競い合います。私たち教会もその影響を受け、メッセージや祈りは短くなり、じっくり聖書を学ぶことを避け、次々とイベントを企画してはそれをひたすら消化していくような集まりになってしまいました。今やこの世全体が「行き過ぎをして」つまり生き急いでいます。しかし聖書は言います。

【新改訳改訂第3版】

箴言 19:2 熱心だけで知識のないのはよくない。 **急ぎ足の者はつまずく。**

と。聖書は「熱心だけで知識のないのはよくない」すなわち悪いと言っています。そして「急ぎ足の者はつまずく」、この「つまずく」はヘブル語ではハーター(חָטָא)「罪を犯す」という意味です。私たちはこの世が急ごう、急がせようとするならばなおのこと、この世と調子を合わせるのではなく、むしろそれに逆行してじっくりと、ゆっくりと「キリストの教えのうちにとどまる」すなわち聖書と向き合い、そこに指し示されたキリストすなわちメシアであるイエシュアに目を留める必要があるのではないのでしょうか。

1:10 あなたがたのところに来る人で、この教えを持って来ない者は、家に受け入れてはいけません。その人にあいさつのことばをかけてもいけません。

1:11 そういう人にあいさつすれば、その悪い行いをともにすることになります。

「反キリスト」の考えは、自然や生き物からは伝わっては来ません。それは常に人を通して私たちに影響を与えてきます。つまり誰を見るか、誰に聞くか、誰と交わるかが重要なのです。私たちが受け入れるべき、求めるべき人間関係、それは「互いに愛し合いなさい」というイエシュアの戒めに込められた、花婿イエシュア、再臨のイエシュアを待ち望むことを覚える人との交わりです。筆者であるヨハネは、ただその一事に励むことをここに強調しているかのように感じられます。



## 6. 顔を合わせて

1:12 あなたがたに書くべきことがたくさんありますが、紙と墨でしたくはありません。あなたがたのところに行って、顔を合わせて語りたいと思います。私たちの喜びが全きものとなるためにです。

この言葉は、筆者ヨハネの思いではありますが、何かイエシュアの思いが反映されているようにも思えます。「あなたがたのために『紙と墨で』聖書を与えたが、それを読ませることよりも、顔と顔を合わせて語りたい、それこそがわたしの全き喜びなのだ」というようなイエシュアの思いが伝わってくるのです。私たちは花嫁である教会として、花婿であるイエシュアを待ち望む者ですが、イエシュアもまた、私たち以上の強い思いで私たちを迎える日を、顔と顔を合わせて交わるその日を待ち望んでおられることがここに表されていると感じられ、胸がいっぱいになります。

## 7. 教会から教会へ

1:13 選ばれたあなたの姉妹の子どもたちが、あなたによろしくと言っています。

冒頭でこの手紙は「選ばれた夫人とその子どもたち」という尊称をもって教会に宛てた手紙であると述べました。そしてここでは「選ばれたあなたの姉妹の子どもたち」がその教会にあいさつを送っています。これもまた教会であると考えられます。つまりこの手紙は、教会から教会に、「選ばれた」教会から「選ばれた」教会へ宛てて書かれた手紙でもあるということです。教会の働きは、礼拝をささげ、聖書を学び、伝道することだけでなく、他の教会を励ますという働きがあるということが示されています。自分の教会だけでなく、他の教会にも心を配り、時には手を差し伸べる姿勢が必要です。そしてその「選ばれた」教会の目的はもちろん「互いに愛し合うこと」というイエシュアの戒めに指し示された、イエシュアの再臨をともに待ち望むことであると信じます。そしてこの教会と「互いに愛し合う」関係を持つことができる他の教会が与えられることを願い求めたいと思います。そしてともに神のご計画に対して目の開かれた教会として立ち、「主イエシュアよ。来てください。」というあいさつを交わしたいと願わされています。